

一時滞在施設における 傷病者対応のポイント

大規模災害時の帰宅困難者民間一時滞在施設の
対応力強化事業

東京都総務局総合防災部

東京医科歯科大学

令和5年4月

目次

I. 災害時の医療救護体制 1 頁

II. 応急救護

• 平時の準備のポイント 4 頁

• 傷病者対応のポイント 4 頁

1. けが（擦り傷、切り傷） 5 頁

2. 出血が多い場合 5 頁

3. 骨折疑い・骨折 6 頁

4. やけど 7 頁

5. 人が倒れていた場合 7 頁

6. 搬送方法

（1）準備のポイント 8 頁

（2）担架で運ぶ方法 9 頁

（3）3人以上で運ぶ方法 10 頁

I. 災害時の医療 救護体制

◆発災時にけがをしてしまったら？ 体調が悪くなったら？

大規模な災害が起きた直後は、けがや体調不良で医療機関を受診したくても、同じように医療を求める人が大量に発生するため、平常時のように円滑に医療へアクセスすることが難しくなるおそれがあります。

首都直下地震等による 東京の被害想定 (R4.5) 冬夕方・風速8m/s	
負傷者数	93,435人
うち、重症者数	13,829人

事業所に留まる従業員を守るためにも、また一人一人が自分や家族を守るためにも、発災時の医療体制を知ったうえで、いざというときの対応を考えておきましょう。

◆応急手当後に「医療救護所」を目指しましょう

発災時に軽症者も重症者も同じように病院に殺到すると、ただでさえ被災している病院がさらに混乱し機能しなくなるおそれがあります。通常の医療体制では対応できなくなる場合、区市町村は、各地域防災計画等に基づいて**医療救護所**を設置します。医療救護所は、**主に災害拠点病院等の近接地等に設置される緊急医療救護所と、避難所に設置される避難所医療救護所**に分類されます。

発災時の傷病者は、まず医療救護所でトリアージ（治療優先度の決定）を行い、軽症ならその場で処置を、重症なら災害拠点病院等の高度医療機関へ搬送等を実施します。医療救護所は区市町村ごとに設置場所が事前に決められていることが多いため、平時からどこにあるのか確認しておくことが重要です。



II. 応急救護

平時の準備のポイント

- オフィス家具等を固定する。
- より多くの職員がAEDや応急救護の研修、訓練に参加する。
- 救急箱の中身を確認しておく。
- 近隣の医療機関、各自治体ホームページに掲載されている救護所の場所の確認、リスト化をしておく。
※施設周辺の地図を用いて段差が少なく安全な経路も含めて場所をマッピングしておく。発災時の状況によりルート変更が必要な場合もある。
- 受付等で医療者か確認する体制を整えておく

傷病者対応のポイント

- 医療者がいる場合には、医療者に対応を依頼する。
- 傷病者本人で対応可能な場合には、物を渡し、対応してもらう。
- 清潔な手袋やビニール袋を着用し、素手で血液等に触れないようにする。

1. けが（擦り傷、切り傷）

- (1) ペットボトル等のきれいな水で傷の汚れを洗い流す。
- (2) 清潔なハンカチやガーゼ等で傷を押さえて出血を止める。

2. 出血が多い場合



- (1) 手袋等を着用する。
- (2) 出血部位を覆える。清潔なガーゼ等でやや強く押さえる
- (3) 汚れた傷は、止血後に清潔な水で洗い流してから手当とする。

3. 骨折疑い・骨折

ポイント

- 変形した手足を動かさない、元に戻そうとしない。
- 傷病者の訴えをよく聞く。
骨折部位に触れて無用な痛みを与えない。

(1) 骨折部位を固定する。

※折れた骨の両側の関節より長い雑誌、新聞紙、段ボール等、身の周りにあるものを副え木として利用する。

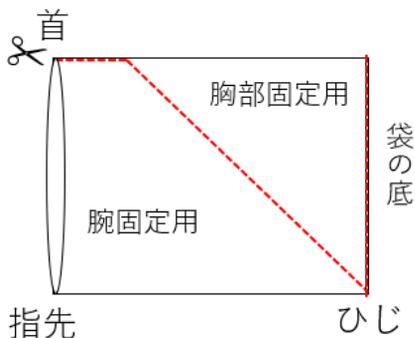


※足の場合は、タオル等当て布を挟む。血行が障害されていないか確認するため、指先を出しておく。

(2) 腕の骨折の場合

※首から大きめのスカーフやごみ袋等で腕を吊るして支える。サイズが大きすぎる場合は、余剰分を切る、結ぶ等で適切な長さ、大きさに調整する。

※ごみ袋45ℓの切り方



肘が出ないように結び目等を作って覆う。

胸部に固定する



(3) 安静にして早めに医療機関、救護所へ。

4. やけど

ポイント

- ❑ 衣類を着用しているときは衣類の上から冷やす。無理に衣服を脱ぐと皮膚がはがれる。
- ❑ **水ぶくれ**が**破れない**ように注意する。
- ❑ **医薬品**などは**塗らない**。

- (1) ペットボトルの水（水道水が出れば水道水）等 **きれいな水**でできるだけ早く冷やす。
- (2) 十分な厚さのあるきれいなガーゼや布等で包み、医療機関へ。

5. 人が倒れていた場合

ポイント

- ❑ 人手を確保し、**複数名**で**対応**する。
- ❑ **安全な場所**で対応する。
- ❑ **意識**、**顔色**、**呼吸**の1つでも普通でなければ危険である。



- (1) **医療者がいるか確認**し、いれば指示に従う。
- (2) 周りと自分の**安全を確認**する。
- (3) 倒れている人に声をかけ、**意識**、**顔色**、**呼吸を確認**する。
- (4) 周りで手の空いている人に**AED**を持ってきてもらう、（つながらないことを想定しつつ）**救急車**を呼んでもらう。
- (5) **心臓マッサージ**等を**継続**し、手の空いている人で**搬送準備**を行う。
- (6) 準備が整ったら**搬送**する。

6. 搬送方法

(1) 準備のポイント

- **搬送前に応急手当**を完了する。
※応急手当を実施していないと状況が悪化する可能性がある。
- 傷病者をどの体位で運ぶか確認する。
※傷病者の希望する体位が原則。
- 搬送する側の体力に応じて、**必要な搬送人員を確保**する。
※人員に余裕があれば交代要員も確保する。
※訓練での経験者が主導する。
- 搬送先と安全な経路を確認する。
- 担架がない場合は、**確実に安全に搬送**できるものを探す（大きな台車等）。
担架等がなくても、**3人以上の人手を確保**できれば人力で搬送することも検討する（十分に注意が必要）

担架搬送は未経験者には難易度高めです。
できれば平時に訓練等で事前に搬送役、傷病者役を経験しておきましょう。
未経験者だけで実践することになる場合は、**なるべく無理せず**、台車の使用なども含め安全に運べる方法を検討しましょう。



(2) 担架で運ぶ方法

- ① 担架を準備する。



- ② 抱き上げて担架に
収容する。



- ③ 傷病者に適した体位を
とらせ、毛布等で保温し、
ベルトや三角巾で
担架に固定する。



- ④ 担架を持ち上げ、足先を先行させる。
※階段を上るとき以外は足側を先行させる。



(3) 3人以上で運ぶ方法

- ① 傷病者の足の方の膝をついて、手の平を上
に傷病者の体の下に
手を入れる。
※3人の場合は片側に2人、
反対側に1人



- ② 頭側の救助者の合図によって、持ち上げた
傷病者を膝にのせ、向き合った救助者と手
首を握り合う。声を掛け合い立ち上がる。



- ③ 傷病者の手足等が
下がらないように、
傷病者の足の方向に
水平に進む。

